

人権コラム（第48回） 「沖縄慰霊の日」から平和を考える

人権コラム第48回を担当する、人権・地域教育課です。

6月23日は「沖縄慰霊の日」でした。沖縄戦犠牲者へ哀悼の意を表し、世界平和を願う日として、戦闘終結から16年が経った1961（昭和36）年に制定されました。沖縄戦における日本軍による組織的戦闘が終結したことに因んだ記念日です。（※「沖縄での全ての戦闘が終わった日」ではありません。沖縄戦を指揮した旧日本軍の司令官が「最後の一人になるまで戦うように」と言い残して自決したため、悲しい命の奪い合いはこの日以降も続きました。）糸満市にある平和祈念公園での追悼式典には多くの人が訪れ、「平和の礎」の前で死没者を悼み、恒久平和を祈念します。

～沖縄戦とは～

太平洋戦争末期、アメリカ軍は沖縄を占領して日本本土に対する攻撃の前線基地にしようとしてしました。これに対して日本軍は、本土決戦を回避すべく沖縄をアメリカによる攻撃の防波堤として、持久戦に持ち込む作戦を立てました。その結果、沖縄本島で民間人を巻き込んだ激しい戦闘が展開されることとなったのです。

アメリカ軍は空爆や艦砲射撃（海上の軍艦から陸地に向けた砲撃）を行い、1945年3月末には慶良間諸島へ、続いて4月1日には沖縄本島へ上陸します。アメリカ軍の圧倒的な物量による攻撃は「鉄の暴風」と例えられ、地形が変わるほど激しいものでした。（THE BOOMの名曲「島唄」の歌詞に出てくる「風」や「嵐」は、この激しい攻撃を指しています。「島唄」は一見すると恋愛を歌った曲ですが、その歌詞には作詞者・宮沢和史さんが沖縄戦に対する思いを込めたもう一つの意味が存在します。）

国際法上、戦争では民間人への攻撃は厳格に禁止されています。しかし沖縄戦では、不足する戦闘員の代替や補助として子どもを含む民間人が駆り出され、軍民合わせて20万人以上、沖縄県民の4人に1人が命を落としました。「アメリカ軍に捕まったら何をされるかわからない。誇り高く自ら命を絶て」という誤った教育により、逃げ場をなくした多くの人々が集団自決という手段を択ばざるを得ませんでした。家族やご近所など親しい人同士が互いの命を奪い合う、この世の地獄のような事態が各地で起こりました。ほかにも「ひめゆり学徒隊」の悲劇や「対馬丸事件」など、沖縄戦に関する悲しい歴史は枚挙にいとまがありません。また、かろうじて生き残った人々も捕虜となり自由を奪われることとなりました。これほど激しい地上戦が行われたのは、日本国内で沖縄だけです。

その後も現在に至るまで、世界各地で罪のない民間人が命の危険にさらされたり、大切なものを搾取されたりすることがずっと続いてきました。ロシアとウクライナの戦争やイスラエル・パレスチナ問題、アメリカとイランの緊張状態など、今この瞬間も世界では、いつ命を奪われるかわからない恐怖の中での生活を多くの人が強いられていることを、わたしたちは忘れてはいけません。戦後81年が過ぎ、実体験を語り継いでくださる方も少なくなっています。「平和」は決して当たり前にあるものではなく、ある日突然崩れ去るかもしれないという危機感を持ちながら、平和な世界の実現に向けて一人一人が過去の戦争から学び続けていくことが大切です。